

陸

4

川飛旅子読本出版



「田川飛旅子読本」出版記念会

日本出版クラブ会館於



石原八東氏



古沢太穂、松沢 昭、倉橋羊村の各氏



有馬 朗人氏



青木 幹氏と寒雷の方々



贈呈された花束を信子夫人へ

「田川飛旅子読本」出版記念会

山本 千代子

平成八年一月二十八日午後六時より、日本出版クラブ会館（神楽坂）に於て、出版記念のお祝いの会がもたれました。この日は冬青空の美しい祝賀日和でした。

各地から陸会員が参集し、俳壇関係の先生方、出版関係の方々、陸誌に執筆などでお世話になった方々をお招きしての一夜でした。

この報告を書くに当って、テープを開き直しますと、ご来賓の皆様が貴重で楽しい話をして下さっております。行き届かないところもあったと思いますが、皆様からの会終了後の感想では、地味だけれども温かい雰囲気良かったという言葉を頂き、肩の荷を下ろしております。

なるべく忠実に会の経過を再録し、この度の出版に関して基金その他でお世話になりました陸の皆様にお礼申し上げますと共に、その祝賀会の様子をご報告致します。

一 司 会

中村 和弘

本日は、ご来賓の皆様、また遠路よりの陸会員の皆様ありがとうございます。陸といえますのは、田川主宰の性格もありますし、それに輪をかけて編集の私の性格もありまして、誠に地味な会であり

ます。それには功罪あると思いますが、外部の方をお招きしてこういう会を開くのは、陸二十年間で初めてのことでもあります。

地味ではありますが、作品は一生懸命作っておりますので、その内容にご注目頂けたらと願っております。

不慣れではありますが、中村が司会進行をさせて頂きます。

一 発起人代表挨拶

町山 直由

まず最初に、この貴重な時間をさいてご出席下さいました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

句会などで集った折に、田川主宰の初期の句を知らないのを知りたい、勉強したいという声がありました。そう言われてみますと、第一句集の「花文字」などはもう手に入りませんし、見る機会もありませんでした。

それが、陸二十周年の事業計画の一つとして「田川飛旅子読本」をやるうじやないかということになりました、幸い角川書店さんのご指導をいただき、そして陸会員の皆様のご協力によりこのような立派な本が出来ましたことを皆様と共に喜びたいと思います。

田川さんおめでとうございます。そう言われてみると、田川さんのお祝いの会に出たことがないなあという気がします。しかし、よくよく考えると、ずい分昔、田川さんが工学博士になられた時に、楠本憲吉さんの「なだ万」でお祝いの会があった時に出席した覚えがあります。それ以来のお祝いの会に出られて嬉しい限りです。

私は、田川さんとは、俳句を始めた頃からの付き合いです。私の方が年上ですが、寒雷では田川さんの方が先輩という感じでした。田川さんは横浜にお勤めでしたが、私はその近くで小さな工場をやっておりました。私のところで、寒雷横浜支部の小さな句会を始めました。田川さんをお呼びして、時々出ていただいて一緒に勉強させてもらいました。そういう戦争の時代を過ぎて、戦後になって、読本の年譜にも書いてありますが、労働組合の文化活動の運動がおこって、田川さんの会社の古川電池でも、その運動の一つとして、初級のロシア語講座をやるということになって、頼まれて、初級のロシア語の勉強を田川さんらと一緒にやることがあります。その時の句で、今でも覚えているんですが、「冬の風にうしろ通られ露語習う」という実感の深い句。工場のちょっと暗いところで勉強したわけでした。田川さんとは同じ横浜で会う機会があるもんですから、よく酒を飲んだり、議論をしたりして、お互いの家に泊りあったこともあります。義兄弟のような形でお付き合いをしてきました。しかし、お世話になるのはいつも私の方でした。

戦後レッドページで、お金がなくて、同人費が払えなくて寒雷を

止めたことがあったんですが、その時、田川さんが、心配して下さい、ぼつぼつに払えばいいからと言って下さって、また復活したという経験もあります。

田川さんの俳句は、最初の頃から比べるとずい分変わってきているように思います。それは当然のことなんです。田川さんは、よく手で眼鏡を作って、この中に見るものを俳句にするんだと言っておられたことがあります。そこに焦点を当てて、目に見ゆるもののみな俳句で、作っておられる時期があったと思うんです。それが、だんだん目に見ゆるものから、更に目に見えないものへ焦点を当てて、実に自在になってきているんじゃないかと感じています。その点でも、また追いつけななあと感じております。

とりとめのない話でしたが、これで終わります。おめでとうございます。

一 乾杯の音頭

倉橋 羊村

諸先輩をさしおいて僭越でございますが、ご指名でございますので、つとめさせて頂きます。

「田川飛旅子読本」という全集に近い、そしてコンパクトなもので、これ一冊で田川さんのすべてが分るといって、学ばして頂く者としては大変に便利なものを作って頂いて本当に有難いと思います。

おめでとうございました。ご唱和下さい。乾杯。

田川さんとは、意外に早くからお付き合いを頂いております。昭和二十七年に角川書店の「俳句」が発刊されて、そういうことで東京の俳壇が活気を持ってきた時に、神戸の西東三鬼さんが上京してこられた。三鬼さんが横浜を見たいということで、大野林火さんが音頭をとられて数人がご一緒することになった。皆さん一回りほども上の方で、どういうことだったか、田川さんと私が呼び出されて、横浜郊外の牧場とか、埠頭などを散策した。その時、田川さんは女学校、一、二年位のお嬢さんをお連れになったのをなつかしく思い出します。

その後、田川さんとか私共が現代俳句協会を運営するような時期がありました。丁度その時に、田川さんが工学博士になられた。さき程の話の「なだ万」でのお祝いの会は私が音頭をとったという次第でした。そんなことで、寒雷の人達とも親しくしていただいております。

田川さんは、最高学府の東大を出て、工学博士でおられ、いつも物静かで紳士でおられる。私は、ある意味では一挙手一投足を学ぼうと思つて、注目していたんですけれども。田川さんは、辺幅を飾らないというか、構えたことを一つもなさらぬ。その一つで真似したことは、今も持っていますのでお見せしますが、この手帳にゴムが掛けてある。今田川さんはそうしておられるかどうか、これは田川さんを真似たんです。手帳に名刺やメモをはさんで、バラバラにならないように、ゴムではさんでいるんです。(田川主宰より)「今

もそれやっています」の声あり)

そのうちに、どこかのグラビア写真に、田川さんの書齋が載っていたんですが、書類やら本が机の周りにうず高く積まれて、乱雑に散らかっていて、その真ん中に田川さんがちょこんと座っておられた。私は、これが本当だと、いたく感心しました。ところが、私の仕事部屋も写真に撮られて、その有様が田川さんと全くそっくりでした。田川さんの辺幅を飾らないところ、その点でも学ばせて頂いているというわけです。

それで、クリスチャンでもあって、立派な身の処し方をしておられる。

以前、田川さんが何か本を出された時に、お祝いの会をなさらないですかと聞いたら、社中の人に迷惑をかけてはと考えるので、しないと言われました。実は、その点も田川さんに習いまして、私も四十冊位本を出しましたけれども、一べんも出版記念会というのはいないことにしていました。今度田川さんがなさったものから、それじゃそのうちに私も一べん位やって、あの世へ行こうともし出来れば、田川さんと前後して、古沢さんの後についてあの世へ行きたいと思つています。

どうぞ田川さん、もうしばらく頑張つて、ご交誼をいただきたいと思つます。出版おめでとうございました。

一祝 辞

松澤 昭

大分いただいておりますので、何をお話するか分りませんが、本日はおめでとうございます。一言ではお話出来ないなあという気

持があります。

三つ程お話しますので覚悟して下さい。

三、四十年前になるのかと思いますが、関東俳句連盟というのがあり、その学生俳句大会の時、何かおしゃべりをしてくれということで行きましたら、田川先生と私の二人が講師ということでした。

私は何を話したか忘れてしまいました。田川先生の話は、俳句にとつて何が一番大事かということでした。感覚、感性が如何に大事かということを強調しておられました。その時、いいお話だなあと思つたのを思い出します。

それとね、俳句の世界には目立ちたがり屋が多い。しかし陸の皆さんもそうだけでも、田川先生も、陸誌を拜見していて、非常にうつうつとしたものを持っている作品が多くて、凄いなと思つています。そういう雑誌はこの頃少ないわ。何かうまく言つてごまかしている雑誌が多い。そういう意味で、陸の皆さんよく聞いて、非常にいい仕事をしているんだから。ただね、世渡り下手だね陸は。僕もそうだけど、田川さんがそんなですよ。しかし、それでいいんじゃないの。(拍手) 少数数の連業が集つて、ひっそりという俳句を楽しむのが一番だと思いますが、如何ですか。

読本を読むと、田川さんはよく書いていらつしやる。陸の皆さんは幸せですよ。千人、二千人といらないんで、四、五百人もいれば充分ですから、これからもじっくりとしたいい会を作つて頂きたい。田川さんは、現代俳句協会東京都の創立から十年間協会長をやられましたけれど、田川さんが強調されたのは、和と自由でした。

陸の皆さん気をつけて下さい。田川さんは最近また大分飲むからね、皆さん気をつけて下さい。俳壇広しといえど、田川さんのよう

に、良心、正義感を持っている人はいませんよ。だから、そういう人に長生きしてもらわなければダメなの。どうぞよろしくお願ひします。おめでとうございました。

一 祝 辞

有馬 朗人

田川飛旅子先生おめでとうございます。田川先生とは商売が似ているということもありまして、昔から作品に注目しておりました。また私の師が山口青邨、東大の工学部の名誉教授でありましたけれど、田川先生は東大の工学部ということで、そういう意味でも興味がありました。

今回読本が出て嬉しかったのは、昔の田川さんの俳句を読めることです。「犬交る街へ向けたり眼の模倣」というような句は、私の若い頃拜見して、今でも印象深く覚えております。

この読本の中で、和田悟朗さんが、果して化学者の俳人と言つていいだろうか、と評論で書いていらつしやる。この点について、私も田川さんと同じ身として、自分にもどして考えております。

私が長年田川さんに対して、いい意味での疑問に感じていることがあります。それは、キリスト教徒と俳句という問題。田川さんは若い時にキリスト教徒になつておられる。そのキリスト教徒としての眼が俳句の中に沢山ありますね。「顕微鏡に覗く聖書に生えし微」でしたか、こういう句がありますね。私もキリスト教まがい、私はまがいですが、こういう句をしょつ中やります。

私にも悩みが一つあるわけです。日本人として仏教、神道、アニズムにどっぷり浸っている。しかしながら、一神教的な、キリス

ト教的な厳しい神に対して、私は非常に敬意を表している。

田川先生の場合、逆にかけておられるんじゃないかと思うんです。心の中は、ピシツとした一神教的世界を完全に身につけておられながら、もうちょっと広いアニミズム的な世界にも関心をお持ちのようです。この辺について、じっくり、今回いい本が出来たわけですから、勉強させて頂いて、長年田川先生に対して疑問に思ってたことを自分なりに解析してみたいと思ってる次第です。

今日はこのような素晴らしい会にお招き頂いたことにお礼申し上げます、素晴らしいご本をお祝いを申し上げて、ごあいさつと致します。

一 祝 辞

青木 幹

場違いの所に出されたようで恐縮しております。田川先生とお呼びするより、田川さんとお呼びした方が親しい感じがしますが、私が教育大の附属小学校で長い間勤めている中で、田川さんの坊ちゃんを担任したことがあります。年二回程、日曜日にご父兄に授業風景を見せるということがあります、一年生の時、非常に背の高い、逞しい男性が参観に来ていらっしやる。あの人はどういふ人かなと思いつながら、その時はごあいさつをしなかつたと思います。二学期の時にもいらして、田川さんと分った次第です。

私も、友人に奨められて、臼田亜浪という俳人を先生にして、二人で俳句を始めました。戦争中、疎開をしました。が、授業を毎日しませんので、暇にあかせて俳句を作り亜浪さんに送りました。しかし、二十六年に亜浪さんが亡くなって、すっかり俳句をやめてしまいました。

後年、田川さんが私の家にいらした時、俳句をやりませんかと言われたのですが、私はその気持になれなかつたのです。その後長崎に旅行した時、当時の長崎はまだ俳句の素材が沢山ころがっており、田川さんから言われたことが頭の中にあつたからでしょう、十句ばかり作って、汽車の中で推敲して、田川さんに電話をしました。二、三句読み上げると、田川さんは、ちょっと待ちなさい、メモをするからと言って下さり、こういう賞め方をして下さいました。あなたの俳句は私の思ったよりはるかに上手い、今すぐこの結社へ行っても同人にして貰えるよ、と本当に賞めて下さったのか、おだてられたのか。それから十年ばかり、俳句を作っては田川さんの所へ送り、添削をして頂いたり、批評をして頂いたりしました。そのうちに、陸が発刊になって、たった一回投句しただけで、大褒申し訳ないことですが、それ以来の十年で、全くいたらない弟子でございます。

今日はおめでたい席にお招きを頂き、奥様とも久し振りにお話をすることが出来て有難く、また愉快に思つてこの席に侍らせて頂きました。

田川さん、ますますお元気で、陸の盛んになることを遠くからお祈りをしております。

一 祝 電

「飛旅子大人のお元気を祈つてやみません。風邪の為出席出来ず残念です」金子兜太。矢島房利、大阪海光句会、河口俳句会、麻田すみえ、安藤綾子、岡崎路傍石、以上の皆様より頂きました。

今晩は本当にありがとうございました。もう一声出すと涙が流れそうです。

私は、楸邨という先生にめぐり逢って、教えを受けて、うんと啓蒙されました。楸邨というのはいい先生で大変な大物でございました。

楸邨は先生でしたが、今日ある私を支えて下さったのは、もっと沢山の友達なんです。実はね。その一例は、先程お話いただいた太穂さんなどは、昔から飲み友達です。生きているシャコ天ぶらを教えてもらったのも太穂さんです。いい先生があつて、いい友達がいなければダメです。俳句というのはね。一人で上手くなるなんてことはあり得ません。

まずいい先生を掴む。ところが、いい先生というのはそうはいないんですね。何人も先生がいるというのは、ちょっとインチキですからね。それを見付けるというのは大変難しい。だけでも、友を見付けるというのはいいんですよ。友というライバルと俳句を競い合う。このことが俳句を伸ばすんじゃないでしょうか。私の経験から言ってもそうです。そういう意味で、今隣に座っている人が自分を育ててくれるんじゃないでしょうか。先生じゃないですよ。

誠を尽す、という言葉があります。自分の誠を俳句に打ち込んでゆく。現代は、そういうものが無くなってしまつて、どうなんでしょう。沢山の人が沢山の人生を送っています。今、本当に自分をリードしているのは何なんだと考えた時に、いささか索漠とし

た気がします。私もそうです。そういう中に、私を救ってくれたのは俳句でした。

私が「寒雷」に入ったのは、文理大へ入っていた福家君が楸邨先生を紹介してくれたお陰でした。私は「寒雷」の創刊号の巻頭になりましたが、これは先生の鼻唄でしょうね。その頃田川というのを知っていらしたんですね。大塚の近くにあつた楸邨先生のお家をお訪ねしたこともありましたしね。

「寒雷」で私の次にいいのは、永田耕衣先生でした。永田耕衣さんという人は、今も私は大変に尊敬しています。向うはダメですね。私を尊敬してくれない。

私はどういうわけだったか、協会というところに誘われて、俳壇の沢山の方と知り合いになり、飲んだり食べたりという機会も多くあり、私自身にとっては良かったと思っております。その間に、お前の俳句はダメだと言われて育ちました。

そういう中で、俳句のとりこになつていつて、そういう人間は会社では駄目ですね。社長位にはなるつもりでしたがなれませんでした。それは俳句のお陰です。俳句に恨みを持っています。俳句で何かしなければ死に切れない。(笑)

人生いろんなことがあります。人間志というものが大切ですよ。「よしっ」というもの、これだけは他人に譲らないというものがあればいい。その一つに、簡単にやれる俳句というものがあつた。

自分の身代りになつて作品が残つてくれる。今日はこんな会をして貰い、沢山の先生方にも来て頂き本当に嬉しい限りです。本日は、大阪方面の旅費のかかる方は遠慮してお招きしませんでした。近場の方だけの会と思つていたのが、こんなに

沢山おいで下さってありがとうございます。

石原八束さんには、現代俳句協会をやっていた頃に、ずい分ご指導頂いて、俳壇のあり方などというものをつぶさに教えて頂きました。そういう偉い先生にいらして頂きまして、恐縮です。

私が作った句であり、書いたものではありますが、「読本」というものによってくれたのは、うちの編集部がみなやってくれたんです。

お忙しい中に、こんなに沢山の方に集って頂き、私にとっては感涙あふるる気持ちでございます。皆さんありがとうございます。

皆さん、俳句というのは、とっても深いものです。一人ひとり自分で掴んだ俳句というものは、何かを自分に与えてくれます。感謝の言葉といたします。

一 主宰へ花束贈呈

主宰から「これは信子へ」と、信子夫人へ贈られました。

一 友人として中締め挨拶

加藤山査子

今日は、私の古くからの友人であります田川飛旅子先生の「田川飛旅子読本」出版記念会に、現俳壇をリードして下さっておられる先生方、また総合誌の編集を通して俳句の興隆にお尽しいただいている方々のご来臨を得まして、また、陸としては全国からの会員が集りまして、先生のお祝いの会を催したわけでございます。

皆様から大変貴重なお話を伺いましたり、ご歓談を頂きまして、

立派な会が出来ましたことを、厚くお礼申し上げます。

田川さんと私は、昔、府立六中（現新宿高校）で、昭和二年から一緒に机を並べて勉強したわけでございまして、古いと言えば、信子夫人より長いわけでございます。

その頃の思い出ということになりました。この先生は、大変な秀才で、優等生ということでした。中学なんかではいろんな階級がありました。ファーストクラスに乗る人と、エコノミーに乗る人と、エコノミーにも乗れなくて屋根裏に乗っている人というわけですね。田川先生はファーストクラスで、その後、一高、東大と超エリートコースを歩まれたわけですね。

そういうわけで、仲間に聞いてみますと、あいつは出来たなあとか、秀才の仲間だったなあという話ばかりでして、『坊ちゃん』に出てくるような業績は余りないんです。女性の風呂をのぞいたとか、裸で走ったとか、そういうことは全くない人でした。見えないうところでは分りません、むっつり何かとこのうのもあります。真面目人間ということで、先生の受けも非常にいいし、今でいういじめも受けないという生徒だったと思います。

と言いますと、つまらない人間のように見えますが、そうではありませんで、工学部に行かれたんですが、早くから短歌を始められ、俳句で出色の業績を示されたわけです。我々の仲間では、やはり一番存在感のある人じゃないかなと思います。名門校でしたので、我がの間でも偉くなった人は沢山いますが、退職して十年、二十年経ちますと、そういう人が居たなあという風になってしまいます。その点、我が田川飛旅子さんは、俳句という文芸を通して、昭和、平成に足跡を残したと共に、未来永劫に飛旅子俳句の業績というも

のは残ってゆくだろう。そういう意味で、いい人生を歩まれたという評価は、我々の仲間であり、私も全く異論がありません。

田川先生は、まだ八十歳ちょっとのところですから、俳句的にいうならまだ壮年でありますので、ますますお元気で、我々門下生を鍛えて頂き、更なる業績を残して頂きたいと思えます。

本日はありがとうございます。皆様方のこれからますますのご健勝とご健吟をお祈り致しまして、中締めのご挨拶いたします。

一 終 了

中村 和弘

「陸」は今後も、地味な結社として、作品主義でやってゆきたいと思えますので、よろしくお願い申し上げます。

来賓の方々（受付順、敬称略）

松澤 昭、山岡喜美子（ふらんす堂）、今井 聖、村上 護、石原八束、倉橋羊村、今 秀己（角川書店「俳句」編集長、赤塚才市（俳句研究編集長）、古沢太穂、加藤瑠璃子、有馬朗人、小樽山繁子、久保田慶子、小畑祐三郎（角川文化振興財団）、山口十八良（俳句研究）、青木 幹、鈴木すみ代（東京四季出版）、大李克己（角川文化振興財団）

飛旅子先生のスクラップファイル

加藤 喜代人

周知のごとく去る一月二十八日、新宿区袋町の日本出版クラブ会

館で、『陸』新年俳句大会が十三時より十七時まで、つづいて十八時より『田川飛旅子読本』の出版記念会が開宴された。その祝宴と俳句大会の報告記は、山本さんが書かれているので割愛するが、当夜のパーティーには、飛旅子先生の『寒雷』創刊時からの朋友である古沢太穂氏をはじめとして、石原八束、有馬朗人、倉橋羊村、松澤昭、小檜山繁子、加藤瑠璃子氏等、俳壇に名の通った先生方と、

『俳句』編集長今秀己氏、『俳句研究』編集長山口十八良氏、『田川飛旅子読本』の作成を担当された、角川文化振興財団の大林克己氏等、俳句ジャーナリズムの錚々たる方々が、ご多忙の中を来賓として出席して下さった。ちなみに、出席を予定されていた金子兜太氏は、生憎の風邪のため参加出来なくなってしまうとのこと、祝電を寄せられた。で、概略以上のような来賓の顔ぶれからしても、飛旅子先生の俳壇に於てのステータスと人徳のほどが、派手な催し事を好まれない先生の気質を知っている者には、尚更再確認出来たことと思う。それに私の場合、四十数年前の一時期、いくつかの句会で何かと教示にあずかった太穂氏が、半青年だった頃の私の顔を覚えていて下さったらしく、一と目で私が出たこと、ほほえみながら握手して下さったその感慨とを、併せて特にこの文章の前段に記して

おきたい。

さて、『田川飛旅子読本』に加えるべき文献解題のまとめを依頼され、私が担当することになり、私なりに資料としての形づくりをしたのであるが、立派な書物となった『田川飛旅子読本』所収のそれを読み直してみると、裏付けの伴った資料の不足や、日時の制約といった背景があったとしても、表題と執筆者のみを簡条書式的に紹介したものが多いのを否めず、今になって云々するのはおかしが、不満でならない。周田の仲間は「大変だったでしょう」と労ってくれるが、飛旅子先生はじめ、殊に『陸』につながる方々の期待に、満足には応えてはいないのでない筈だと、努力不足を自分では思っているのです、この機会に寛恕のほどをお願いしておく。

資料収集のために昨年の二月上旬、上高田の先生のお宅へお邪魔した折のこと。ご存じの方は多いであろうが、先生のお宅は玄関を入るとすぐ正面に、能の稽古が出来ることを前提とした広い板敷きの部屋がある。で、玄関のドアを開けてもらった途端、その広間の三分の一ほどに俳句雑誌の束、句集、俳論集、或いはファイルの類いが所狭しと積まれてあるのが目に入り、先ず気圧された。信子先生が朝からかかって用意された、それが当日これから調べるべき資料の類いであった。

ところで、資料さがしをしながら私が特に関心をもったのは、先生が作られた十冊ほどの古びたスクラップファイルに対してであった。勿論必要になる日の来るのを予期されて、保存に努められたのであろうが、それにしても半世紀以上にわたって、総合俳誌や『寒雷』『風』他の結社誌、或いは新聞等に発表されたご自分の評論、エッセイ、紀行文等を切り抜かれ、年代順にそれは丹念に保存されておられるのである。また、それと同様な方法で多くの俳人達の書かれた田川飛旅子論、飛旅子俳句評価の文章を、ファイルされているその几帳面さもさることながら、先生がご自分の俳人としての道程を、かくも大切にされて来られたのかと、あらためて知り、名状しがたい感銘を覚えた。就中、ファイルを繰っていはっきりと分ったのは、先生が俳壇の注目を集めていった時期と言おうか、『花文字』S30年、『外套』S40年、『植樹祭』S45年、これら句集の上梓は元より、文章をもって俳壇に向い最も多く発言された時期が、三十代、四十代、つまり人生真只中の壮年期に於てであったということである。俳壇に台頭するのには、それだけの実績は勿論であるが、壮年期の勢いというものが如何にかけがえのないものかを、自明の理としていたにも関わらず、私はその大切な年代を平常心を疎そかにして来たとは思わないが、俳句を中断していたので、痛感せざるを得なかった。一家の柱として、男にとって最も努力しなければならぬその年代、ましてや先生のように将来を約束された東大出のエリート社員が、職務と俳句を両立させるのには、社会や人生に対してのハングリー精神と表現意欲もさることながら、それを支える健康な身心と、伴侶の理解と協力が絶対の必要条件の筈であり、その条件に恵まれたとも言えようが、先生は見事に両立を実行され

たからこそ、俳人としての確固としたステータスと共に、古河電池の専務取締役にまで昇られたのだと思う。名を成した俳人は、それに天賦の感性ばかりでなく、青、壮年期を懸命に両立に努めたのであろう。そして先生も、その年代、執筆のために会社とのバランスをとりながら、徹夜をされたり、日曜をつぶされたことなど容易に想像がつく。

齢五十近くになって俳句を再び作るようになった私が、先生の知遇を得られるようになった当初、「俳句を復活させるのには、少し遅すぎたね」と、先生に言われたことがある。勿論俳壇を目指すのにはとの意味であるが、そんな自惚れも気負いも持ち得ないでいたので、どちらかという先生の言葉が、私に対しての過分な期待に依るものだと思われ止められた。更に先生の「桐咲くやあつと云う間の晩年なり」の一句に出合ふに及び、敬意の念が、ぐっと深くなり、『陸』一とすじでゆこうと決めたのである。先生のスクラップファイルを手にしたが、当日は雑然とそんな鈍根多情の想いに捕われつづけていた。

今、『田川飛旅子読本』を前にして、慶と敬の想いと共に、かけがえのない先生のご健康の持続を、只々祈るばかりである。攬筆。